

宇宙生命哲学

ことはじめ

20

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者

伊藤 俊洋

中国内蒙古自治区・フフホト市での体験

11月27日から12月2日まで、内蒙古自治区産官連携国際研究協力事業からの招請によりフフホト市に滞在した。渡航費、滞在費すべて中国政府が賄い、海外からの科学技術導入に対する中国政府の強い意欲を感じた。内蒙古栄養学会と、内蒙古農薬大学で講演（通訳付）をする機会を得た。聴衆はどちらの会場も120名前後で、栄養学会は若い女性が多く、特にマスターコースの女子学生が目立った。農薬大学は、男女の比がほぼ半々で、男子学生の意識に積極性が見られた。内蒙古科学技術庁の役人や大学病院院長、学部長なども臨席してくれた。

講演のタイトルは、「宇宙生命哲学―我々は何処から来たのか、今何処にいるのか、そして、素敵な地球人になる終わりのない練習へ」というもので、宇宙から地球を見ることの重要性、地球上のすべての生物は環境から生まれて来て、死ぬと環境に還るといふ物質循環の世界、人間の一生は素



「地球人になる終わりのない練習」の講演をする筆者
(2019. 12. 1内蒙古農薬大学)

敵な地球人になる終わりのない練習を死ぬまで続けること、という話をした。講演は、質問時間を入れて1時間の予定が、議論が白熱して2時間を越えることになった。役人や教員など年配者の質問は、当面の科学技術を如何に有効利用するかということに集中したのに対し、学生たちの質問は将来の文明のあり方、地球という惑星の運命といった未来社会のあり方に関心が向いていた。

今回は、羽田から北京経由で空路フフホト市へ入った。夜間の北京空港はあたかも灯火管制下にある空港の様に暗く、建物の中も照明は控え目であった。フフホト市のホテルの客室案内書には、エネルギーの節約やフードロスを少なくすることを提唱した「緑色飯店」の頁があり、国を挙げて環境問題に取り組む姿勢が伺えた。これを実効あるものにするためには、ホテル利用者の意識が重要な鍵を握っていると思う。

途中、1日雪が降り、最低気温はマイナス17℃、最高気温もマイナス4℃と厳寒の日もあった

が、堪え難い寒さではなかった。特に室内の温度は何処も23℃前後と快適であったが、外気温との差は大きかった。食事、ファッション、ライフライン何れも基本的に東京の街と変わるところはなかった。帰国の途について、空から見た中国大陸の空のスマック（煤煙）の酷さはかなり深刻で、この大気汚染の下で生活している国民の健康問題が、現政権にとって最重要課題の一つであると思